ある新聞記者のたたかい

——世紀転換期をめぐるアメリカにおける社会調査運動——

井垣章二

1

一八七〇年、デンマークの北海岸の古い町リーベに育ったひとりの青年がアメリカにやってきた。彼は二十一歳で、大工であった。この大工は、それから二十年もするとニューヨークで最も有名な新聞記者になり、のち社会事業家、あるいは社会改良家として目覚しい活躍をし、二十世紀アメリカを築く偉大なアメリカ人の一人となった。ジェコブ・A・リーズ（Jacob A. Riis, 1849–1914）——本稿の主人公である。

リーズについては、新聞記者として、またセツルメント・ワーク、児童の教育や福祉にかかわる社会事業家として、そしてとりわけ都市、住宅問題にかんする社会改良家として、いろいろなとりあげかたができよう。しかしここでの課題は、リーズをアメリカ社会調査発達史に貢献したその先覚者の一人として位置づけ、彼の社会調査にかかわる面を追究するところにある。

アメリカ社会調査の歴史における最先端をかざる人物としては、ドロッシィ・ディクス（Dorothea L. Dix, 1802–1887）があげられる。彼女はマサチューセッツ州の牧師の家に生れ、ユニテリアンの一人として社会活動を行なった

人で、監獄の日曜学校で教師をしていたとき、監獄の中の悲惨な精神障害者の状態に大きなショックをうけ、のち精神障害者の全国調査を行ない、その事実によって障害者処遇にかんする国家対策の緊急性を訴え果敢な活動を続けた偉大な社会改良家である。「惨たんたる、辛苦の、しかも入念な、八年間の調査」と彼女自身がいうように、ごく一部を除く全州にわたって、六万マイルを駈けめぐって、彼女は精力的な調査を遂行した。かくして彼女は「論争の余地なき事実をうちたてる」ことによって精神障害者処遇の改善を議会に訴えたわけであるが、それは議員をして改善にたちむかわせる大きなショックをあたえながら、ピアース大統領の拒否するところとなり、彼女の努力は実のらずに終った。この結果、アメリカにおいて精神障害者に対する国家対策は一世紀近く遅れをとってしまったという。(1)

しかし社会調査が中心テーマであるならばそのことは余談であろう。ただディクスがこのような調査を行なったという事実だけで十分である。彼女が議会に訴えたのが一八四八年、調査は四十年代ということである。一方、アメリカにおける、社会調査の社会調査たる本格的、組織的な調査の最初のこころみは、ポール・ケロッグ（Paul U. Kellogg）によるピッツバーグ調査（Pittsburgh Survey）である。これは一九〇九年に始まる調査であるが、そうするとディクスの調査とケロッグの調査の間には半世紀、いや七〇年近い空白があることになる。ディクスの手法は誰かに学びとられたであろうか。それについては知るところでないが、としても、ピッツバーグ調査は忽然と登場したのであろうか。ピッツバーグ調査はイギリスにおけるチャールス・ブース（Charles Booth, 1840-1916）が一八八六年から始めたロンドン労働者階級の調査（*Life and Labour of the People in London*, 1889-1902）の影響とされている。名実ともに近代社会調査の礎を築いた社会調査の偉大な先覚者として、ブースのその調査は、以後の英国社会調査の発展方向を決定するとともに、その影響は遠く海外に及び、ピッツバーグ調査もそれによって生みだされたのである。ケロッグ自身、これについて次のように述べている。「ブースはロンドン民衆のパノラマ的な分析を行なったが、その範囲を単一の巧妙な言葉に圧縮した。すなわち彼らの生活と労働とした。この調査はピッツバーグの労働者人口を研究するものである

が、ブースの調査ほど徹底的なものではないとしても、同じ二大分類に立脚するものである……。[2]」このようにピッツバーグ調査は小型のブース的アメリカ版であるが、しかしながらブースの影響のみでそれが忽然と現われたわけでない。ピッツバーグ調査に向うアメリカの社会的状況はどのようなものであったろうか。折しも世紀転換期、そしていわゆる「革新時代」(Progressive Era) にこの調査は行なわれた。それは「革新時代」の産物である。

「革新時代」を生みだし発展させた人物は数多くあげることができる。調査活動もその運動の重要な一つだとしたら、それにかかわる人物は誰だれがあるであろうか。アメリカにおける社会調査発展史を比較的詳しく書いたものとしては、ポーリン・ヤング (Pauline V. Young, *Scientific Social Surveys and Research*, 1949) があげられるが、それによるとディクスについてはふれられずに、調査活動の発端を世紀転換期をめぐって活躍した、いわゆるマックレーカーズ (Muckrakers)＝醜聞あばき、暴露主義者に求めている。われわれのジェコブ・リーズ、それにジョセフ・リンカーン・ステフェンズ (Joseph L. Steffens, 1866–1936) アプトン・シンクレア (Upton B. Sinclair 1878–1968) の三人の名がでてくる。ヤングによれば、都市の政治の腐敗、貧困労働者の悲惨をきわめた労働生活、スラムの非人間的生活状況など、社会の隠れた暗黒面に自から踏みこんで事実をあばいたこれらマックレーカーたちの活動が、民衆の社会改良意欲を刺激することによって、自分たちの住む町の実態の究明、すなわち調査に志向させたという。[3] ピッツバーグ調査は、ブースの影響もさることながら、こうしたアメリカ社会の大きな流れの中に必然的に生みだされたというべきである。

ヤングのあげた三人のマックレーカーズのうち年代的に一番早くくるのがジェコブ・リーズである。ステフェンズやシンクレアのその活動が二十世紀に入ってからであるのに対して、一八八〇年代に早くも彼の活動ははじまるからである。しかし「世紀転換期」「革新時代」「マックレーカーズ」「社会調査」の関連を追究することは少々あとのこととして、次に、とりあえず、われわれの主人公リーズの物語を明らかにすることにしよう。

2

「私の少年時代、デンマーク北海岸の古都リーベの郊外に、ニブス川にかかる木の橋があった。きゃしゃな組立てのその橋は、ボートがくぐりぬけられるように、その下はラクダのコブみたいな対のアーチになっていた。この橋の上に、私の物語ははじまる。橋はずっと以前になくなってしまったし、われわれが駈けまわるのを見ていた草の生い茂ったあの小路も今はもう跡形もない。でもそれは私の記憶の中に、四十年も昔の全くその通りに存在している。いつも、そこは夏で、川岸に沿って茂った忘れな草のあいだを蜜蜂がブンブン飛んでいて、きれいな流れの中に白鳥が首をもたげる。ダムにかかった水車のカタカタいう音がねむけをさそう鼻歌となってのぼってきて、川辺の低い草地や原っぱの甘い香がただよってくる。この橋の上で少年と少女が出合う。少年は大工の店から昼食をしに家に帰る途中で、片腕に毛糸のジャケツをひっさげ、男の子らしく元気に口笛を吹いている。少女が通りかかったとき、少年は、はたと口笛をやめて、たち止って彼女を見送る。何だか見られているような気がして、橋の向う側で少女はふりかえる。彼が見つめているのを知ると、少女は可愛い頭を少しつんとあげて行ってしまう。彼女がお茶目な様子で一瞬そこに立ち止ったとき、その少女――黒の縫い取りをしたジャケツを着て青銅色のちっちゃなブーツをはき、教科書を手にしたとてもきれいな女の子の姿は、少年の心に永遠に消えることなきものとなってしまったのである。[4]」

これは小説ではない。リーズの自伝「あるアメリカ人の育いたち」（*The Making of An American*, 1901）の冒頭の一節である。この出だしを読む限りでは、読者は、故里や少年時代への回想を、橋の上の少年少女の出合いとして美化するリーズのロマンチック加減も相当なものだと思い、以後の自伝の展開に不安も感じよう。しかし、しばらく読んでゆくと、この出合はリーズの運命を決する一大事件であったことがわかる。紆余曲折の末、彼女は彼の妻となったし、この出合と彼女にまつわる事件がなかったなら、彼はデンマークを去ってアメリカに行くことにはならなかったはずだ

からである。かくしてそれは、彼の生涯と、極端ないい方ではある意味で、アメリカの歴史を変える事件であったといえるのである。主としてこの「自伝」にたよりながら、彼の行動と全体像をひととおり描いておくことにしよう。

彼は一八四九年の生れ、父親は学校の先生であった。学校にも通ったが余り面白くなかった。しかし英語には興味をもち、チャールス・ディケンズの作品に引かれたという。このことも何らか、のちの彼のアメリカ行きに関係しているのかもしれない。彼女とは十分仲よくなれまいまま、コペンハーゲンのある立派な建築家の許に大工の修業をするために町を離れた。数年して当地のギルドから資格を取得し、故里にとんで帰えり、その日のうちに彼女に求婚するが、彼女の父親からつれなく拒否されてしまう。それを目当てに生きてきた彼はすっかり絶望し、彼女からできる限り遠へ離れること考え、かくしてアメリカ行きを決意する。友達などから贈られた餞別は約四十ドル。彼女には別れも告げられずにリーベを去ったのである。

長い航海の後、ある「美しい春の朝」彼はニューヨークに着いた。真直ぐにずっとのびる道路、広くてにぎやかな町。この何処かに自分が住み生きてゆく場所があるに違いないと、希望に胸をふくらませる。大工の仕事は十分できるわけだが、「カナヅチとノコギリ」には彼女との悲しい思い出がつきまとうので、それはしたくなかった。この新世界、自由な天地、青年はどんなことでもできよう。機会があればどんなものでもつかめよう。彼は上陸してから、どういうことか大してない全財産の半分もはたいて大きなピストルを買い、それをぶらさげてニューヨークの町をさまよう。彼はこのことを「その国のしきたりはそうだと思ったから」と述懐するが、当時のアメリカが遠くヨーロッパの人たちにどんな風に思われていたかを示す一つの事例であろう。

到着後数年間、新世界の彼にあたえたものは、無一文、飢え、宿無し、放浪のどん底生活も含めて孤独で貧困な暮しでしかなかった。数日、何ひとつ食べられなかったこともある。野宿をして農村地帯で日雇になったことも、ほとんど何もない持物のうち靴まで質に入れてしまったこともある。「どんなにみじめであっても、気位が高かったので物乞は

できなかった」「一度だって物乞したことはなかったと確信する」と彼は強調する。沛然と冷雨の注ぐニューヨークの夜の街、ついに警察の浮浪者収容所に一宿を乞い、その夜、ただ一つきりの財産、首にかけたロケットを盗まれ、翌朝、船の運賃にそれ以外に何一つもつものもなかったので絹のハンケチを渡し、一文なしの放浪。この放浪生活のくだりは、読者はこの哀れな移民リーズに知らず知らず同一化してしまい読むことを止められない一節である。そんなとき、少年時代の貧困生活の体験をもとに、貧者の友として貧民を描いたチャールズ・ディケンズの代表作「デイヴィド・コパフィールド」の中の、最も光った描写として有名な、デイビィドが奉公先の酒瓶屋をとび出して、野宿をし、一片のパンのために上着を売り、伯母の家を尋ねて向うドォヴァ街道の悲惨な一人旅を思い出すのである。リーズのこの自伝は部分部分 "*The Outlook*" など雑誌に発表されたものであるが、これらは作り話なのかと彼は問われたという。一書としてまとめたこの機会に、かかる「質問をした人びとに対して、私はここで作り話でないことを言っておきたいし、また私はそうでないことを大いによろこびとしている」[5]といっている。敢えて彼がことわらなければならないほど彼の生涯は一大叙事詩であったのである。

フィラデルフィアでデンマークの知人に会い彼の放浪生活は終り、手工業などしつつ、スカンジナビヤ人のセツルメントで教師のような仕事もしたりして、一応生活は落着く。その中で彼は新聞記者になることを夢みるのである。事実を追求する記者の仕事は、いろいろの職業の中でもっとも価値あるものと、彼は考えるようになったからである。また、それとともに彼自身もいっているように、故里の彼の父親は教師をしながら地方紙の編集の仕事もしていたことが、そうした職業選択に彼を方向づけたことも考えられる。ある新聞社にとび込んで、編集長をつかまえ、リポーターにしてほしいと売り込む。編集長は、ゴツゴツした手をした青二才をじろりと見て、「お前は何をしているのだね？」と問う。「大工です」とリーズは答える。編集長は大笑して、有無を言わず彼の面前でドァーをピシャリと閉め追い払ってしまう。リーズは「私の高慢の鼻をへし折る事件」といっているが、この直後、おもてへ出て必ず記者になることを決心し

たという。

その後、家具作りなどしたり西へ旅したり、しばらく時はながれた後、ある日新聞に「有能な者、市部編集者（city editor）に」という求人広告のあるのを見て、かつての野心をかきたてられ、自分は能力があるかも、またその仕事はどんなことをするのかわからないまま応募し、幸い受入れられ週給八ドルで地方欄を書いたりする仕事をする。しかしそこはしっかりしていたところでなく、また職を失ったりしたが以後は新聞関係の仕事にかたまっていった。そして別のことではあるが、あの彼女との結婚もできたのである。

メトロポリタン新聞のどれかに足場を得ようと試みたが、いつも失敗に終った。隣人で“*Tribune*”のシティ・エディターをしている人があったので、その人を通じて、すぐにはうまくゆかなかったが、何とか使ってもらえることになる。低賃金であったが、リーズは一生懸命がんばった。そのうちに警察本部詰めに空席ができ、そこに行けることになった。リーズは、新聞記者（newspaperman）といわれるよりも警察関係記者（police reporter）と呼ばれていることが多い。一八七七から八八年まではこのニューヨーク・トリビューン紙の、そして八八年から九九年まではイブニング・サン紙のポリス・リポーターとして、実に二十二年間の記者生活のすべてを彼はその仕事に傾注することになったからである。そしてこうした記者生活が、彼の社会的活動の方向を決定することになるのである。

一般に、ニューヨークのイースト・サイドといわれ、マルベリー街（Mulberry Street）を含む地帯は移民の集中するスラム街であった。荒廃した道路、不良住宅、貧苦にあえぐ人びと――そこにさまざまな事件、悲惨な人生劇が展開される。この地帯がリーズの二十数年に及ぶリポーターとしての活動範囲であった。以前は、自からがひとりの移民として、スラム生活の体験者でもあった。今はリポーターとしてスラム住民の中に分け入ってゆく。これらの体験、貧しい人びとの真実にふれることが彼の将来のあり方を決定することは当然であったろう。リーズは後年、そこで何をしていたのか、どのようにしてあの本を書く足場を見つけたのかと、よく人にきかれるので、新聞社のポリス・リポーター

(police reporter on an newspaper) について、ある程度詳しく述べておくとして、次のように説明している。それは「誰かにトラブルを意味するあらゆるニュース——殺人、火事、自殺、盗み、裁判沙汰になるようなすべての事件——をあつめ処理する者」で、全管区において発生したすべての事件が報告される警察本部がこのマルベリー街にあり、各新聞社はその近くにオフィスをもち、ポリス・リポーターたちはそこに詰めていて、いち早く事件をキャッチし取材活動をする。まわる範囲は警察本部のほか、衛生局、消防局、検死所、税務署に及ぶ、とのことである。しかしリーズの取材活動の模様は、彼の同僚となり、のち代表的なマックレーカーになったリンカーン・ステフェンズによってむしろ生き生きと描かれている。当時、リーズはユダヤ人の一人の青年を助手に使って、リポートの収集・整理を手伝わせ、彼の書いた記事を社にはこばせていた。ステフェンズははじめてリーズに会った日の、彼と助手との仕事ぶりを映画のひとコマのように伝えているが、彼がそこにいた三年の間、毎朝同じ光景が展開されたと書いている。(6)

このポリス・リポーター時代の重要な成果、あるいは大きな出来事としては、スラム住民の生活実態を克明に描き、問題を提示し改善施策を示唆した二著「他の半分の人たちはどんな生活をしているか」(*How the Other Half Lives*, 1890) と「貧民の子供たち」(*The Children of the Poor*, 1892) を相ついであらわしたことと、そして前述のステフェンズやそしてニューヨーク警察総監、州知事等を歴任し、のち第二十六代大統領となった若きセオドア・ルーズベルトとの遭遇があげられる。しかしこの二人の人物がリーズにあたえた影響よりは、リーズが二人にあたえた影響の方が遙かに大きかったことが推察されるので、この遭遇はステフェンズやルーズベルトにとっての問題とすべきかもしれない。ステフェンズはリポーターとしてリーズのやり方を極力真似ようと努めたし、ルーズベルトは、「あと半分の人たちの生活」に感動して、わざわざ彼に会いに訪ねてきたからである。しかしルーズベルトとの出合は彼にとっても生涯の一大事件であった。ステファンズについては何もふれていないが、彼はルーズベルトについては「自伝」の中で一章をさいている。「彼が私に会うためにイブニング・サン社のオフィスにやって来たのは、私が『他の半分の人たちの生

活』を書いて、そうたたないうちであった。その時私は外出中であったので、彼は、私の本を読んだこと、何かお役にたてばと思ってやって来たとだけ書いて帰っていった。それだけで彼がどんな人かよく分った。私ははじめて彼に会ったその日から彼が好きになった。……誰も彼がしたようには私を助けてくれなかった。二年の間、われわれはこのマルベリー街で兄弟であった。[7]」

この一節が、この事情をよく物語っている。ルーズベルトは彼についてどうであったのであろうか。リーズが一九一四年にその「たたかい」の生涯を閉じたとき、彼は“*The Outlook*”に彼に捧げる一文をのせている。「ただ公の関係からだけでジェコブ・リーズについて書くことはむずかしい。彼は私の最も信頼し最も親密な友達の一人であった。リーズはかつて『会った時からずっと兄弟であった』と私のことを言ってくれたが、この事実を私はこの上もなく誇りに思っている。私は、はかり知れず彼を賞讃し尊敬するばかりでなく、あたかも私自身の家族の一員であるかのように、心から彼を愛し、彼の死をいたむものである。[8]」

3

「他の半分の人びとの生活」と「貧民の子供たち」は、ペンとカメラを武器に、スラム街の奥深く潜入して続行した十数年の取材活動にもとづいて書かれている。はじめての著書、「あと半分の人たちの生活」は、もともと彼がそうして撮りまくった写真に説明をそえた写真集であった。[9] それをもっていろいろな雑誌社のドアーをたたいたが誰も関心を示してくれず、また、そこの知人を頼ってハーパーの編集者にかけ合うこともできたが、極くつれなく扱われた。のち“*Scribner's Magazine*”の編集者が写真集をみて興味を示し話をきいてくれた。かくして彼の書いた原稿は、「他の半分の人びとはどのように生活しているか」というタイトルのもとに、一八八九年のクリスマスの日にその社から刊行されたのであった。

彼は、そこで、イタリヤ人街、ユダヤ人街、チャイナ・タウン、人種混合地帯、ドヤ街等、スラムを構成するさまざまな地区、住宅の模様、住民の悲惨な労働と生活を描いている。人口密度、乳幼児死亡率、少年非行率等の統計も含めて一般的記述とともに、彼の行きあたったさまざまな事例や具体的な体験談を織りまぜて「他の半分の人たち」を生き生きと描いている。「暗い階段をのぼってゆくと、おどり場ごとにキャベツや玉ねぎや魚を揚げる嗅がただよってくる。閉ざれた扉の向うにある織物機がヒューヒューと音をたてている……そこはごく小規模な織屋で、五人の男女、まだ一五歳にもなっていない女の子が二人、こちらから尋ねないのに十五歳だという一人の少年などがニッカーボッカーを縫う機械の前にいた。床には縫いかけの服がくるぶしが埋れてしまうぐらいに散らばっている。部屋の引っこんだところには最後の仕上げをまつ何ダースものズボンが積上げられていて、その上にやせやつれた顔の赤ん坊がすねをむきだしにして眠っている。うず高い衣類の山が柵になって、この赤ん坊が床に落ちるのを防いでいる。一生懸命働らいているこの部屋の人びとは、黒いキレを扱っているので顔も手も腕もみんな真黒、われわれが入ったとき顔をあげたのは女と少年だけであった……」そうして彼は彼等にインタービューをする。「帰りに街路を行くと、そこにはもう今までの静けさはない。安アパートの、あかりのついた窓々が巨大な石の壁の中の濁った赤い目のように輝き、戸口からは疲れきった無数の男や女たちが、たて続けの労働で疲れ切った眼を休める前の、半ときの外気を求めて流れ出ている。半裸の子供の群が大通りにも露路にも殺到し、あるいは石の階段の上に不機嫌そうにまどろんでいる。」[11] 目に浮ぶような情景である。

この「あと半分の人たち」の刊行後二年にして発表された「貧民の子供たち」も前者と全く同じ足場にたち、同じ内容を含むものである。彼自身、それらがともに、この現状を改善するための「事実をあつめること」を目的とするものであり、「この二つの本は一つであり」……本書の刊行にあたって「何もつけ加えることはない」といっている。[12] 「貧民の子供たち」はスラムの全体的記述としての「他の半分の人たち」の状況を子供に集中して見直したものであるが、

この子供への問題展開は、「他の半分の人たち」によってある程度予測し得るものである。というのは、リーズはそこにおいて、後半は次第に子供の問題に集中し、未来を築く子供たちがスラムの悪環境にさらされてる問題性を大いに強調するところとなっているからである。「貧民の子供たち」は「他の半分の人たち」で述べたりなかった続編であろうが、それよりもそれこそがリーズの中心課題であったともいえる。リーズの目指すところは社会改良であり、社会の改善は子供の問題、子供をとりまく環境をどうするかこそ、彼にとっての中心課題となるからである。「この都市の苦難にあえぐ民衆の子供たちを育成するそのことは、ほかならず……一国の運命を形成すること」であり、「児童の問題は国家の問題である。[13]」

「貧民の子供たち」では、イタリヤ人、ユダヤ人街を中心にスラムの子供のさまざまな生活の悲惨を記録している。住宅その他みじめな家庭生活環境、仕事場や工場における劣悪な労働条件と年少労働の実態。彼は問題の巣窟である立体スラムに分け入りあるいは深夜の工場を急襲する。「他の半分の人びと」は何れかというと一般的記述が多いが、ここでは実態はさまざまな具体的事例に則していっそう生き生きと描かれている。「……いろいろある中で、あるイタリヤ人長屋を思い出す。そこは南五番街の半地下のホールで、いつも悪臭がみち、いたるところネズミが走りまわっている朽ちかけた貸家の横を通る道の奥にある。……その部屋は三つの大きなベッドで一ぱいになってしまって、むき出しの床がほんのわずか見えるだけ、壁はほこりと煙で真黒……」という具合でその住民の生活が描かれる。「街で見かけた二人の少年――一人は九歳でもう一人は一二歳……私がその子に出合ったのはマルベリー街の警察であった……」「私がかつてずっと夜おそくなって訪問したある家……」「すべてを語るある人物の物語りを話すことにしょう。それは一年前、新聞記者として自分の仕事をしていたときに行き当ったものである……[14]」たとえば、このようなでだしで物語りがはじまり、統計の提示も含めて一般的な記述、関連的な記述を織りまぜて、次から次へと展開されてゆく。一章のすべてを一つのケースの提示にあてているところもある。

本書の全体を通じて、そして後半においてますます明確にされる一本の線は、児童に対する教育と福祉の実践的諸活動の現状把握と評価をふまえて、児童問題解明に如何にとりくむかという実践的課題である。しかしここでのわれわれのテーマとしては、さまざまな具体的事例を駆使した実態の克明な記述として、「他の半分の人びと」以上に、これが調査的記録となっているというだけで十分である。第一作ほどの人気は博しはしなかったが、当時の批評家たちも、本書はそれ以上に論拠とする諸事実を豊富に含んでいると、高く評価したのであった。(15)

4

それらが貧困階級や彼等の住む都市の劣悪な生活環境に注意を喚起し社会改良へ向わせた、その大きな影響は別として、リーズと社会調査との関連を追究するわれわれとしては、この二書が調査報告書としてのどれだけの価値を含むかが評価されなければならないであろう。「他の半分の人たち」新版のはじめにはビゲロー（Donald N. Bigelow）による解説が付せられているが、それによると、スラムの実態究明という目標にそれぞれが大まかに結びついているというだけの「非系統的な物語の集合体」であり、その手法は、「すぐれて個人的、追憶的」で「インティメートな、自伝に類すべき記述的報告」といえ、主題へのアプローチは「同情的でセンチメンタルな物語家と公憤を禁じ得ない高潔な改良家の間を往来している」と評されている。その通りで冷静な報告書というより訴えの書として受けとめられるのが適当なような感じもする。公平で客観性に徹しようとするのが調査の本質とすると、この主観的、感情的な手法に基づく記述は、調査とはほど遠い内容を示すものであるということができるかもしれない。

リーズが本書をまとめようとしていた丁度その頃、海の向うでは、チャールス・ブースがかの有名なロンドン調査を行なっていた。ブースは貧しい人びとの無数の物語を掌中にしたが、それらを提示することをむしろ排し、データの数量化をはかることによって客観性に徹しようとした。偉大な社会調査創始者ブースからすれば、リーズのそれは遠く及

ばないことは明らかである。しかし同時期だからとしても両者を比較することはもともと適当ではないであろう。当時のヨーロッパにおける統計学の発達状況とブースが社会科学者でもあったことを考えると、新大陸における、何らアカデミックな訓練に浴しなかった職人リーズをブースと比較することはできない。くりかえしていうようにあの二著は新聞記者としての取材活動の体験から書かれたものであった。ブースが一歩おいて事実を冷静に見較べたのに対してリーズは、いわばからだで事実にぶつかり、全身全霊でそれを受けとめたといえよう。かくして、調査者としてのリーズの究明は、彼が事実というものをどう考え、取材活動や事実提示について、ひいてはリポーター、記者というものについて、どう考えていたかを考察することからはじめられるべきであろう。

彼は「自伝」において何故新聞記者になろうとしたかについて書いているが、事実を獲得し報道する記者の仕事は、事実の重要性にかんがみ、社会における極めて有意義な職業だからだと熱っぽく述べている。「リポーターの仕事はあらゆる職業のうちで最高至上のものであり、かつ最も高貴なものである。正しいものから間違ったものをふるいおとし、あやまりを罰し得るのは、リポーターを除いて他にない。この点、私は間違っていなかった。私はずっとこの意見をかえることはなかったし、また今後もかえることはないであろう。事実の力（the power of fact）は今日もまた何時の日でも最高の起動力である。」[16] また同様の見解が第二作「貧民の子供たち」の冒頭にのべられている。これら二つの書物において目指されたものは、「理論でなく事実である。事実こそ、これらページに私が書きとめようと努めたものだ。事実の用い方については読者は私とは違うかもしれない。読者が正しくて私が間違っているかもしれない。しかし事実そのものは論争の余地なきものと私は思う。今日のあやまれる予言者は不用意なリポーターよりはまだ害は少ないだろう。私はその汚名はこうむりたくない。」[17] リポーターでありさえすればよいのではない。事実にかんするその戦略的地点をしめるゆえに、不適当なリポーターは危険であり害悪をもたらすものになる。よきリポーターであらなければならない。

彼が事実をもって訴えようとした事実とは、一般の人びとからとりのこされ無視されている貧しい人たちの生活の実態であった。彼は何故新聞記者になったかその一つの理由は、当人はいいところに生活し、貧しい人たちの真の理解者と到底いい得ない人たちがいいかげんなことを書いていることに対する義憤であり、誰かが真実を告げなければならないと痛感したからだという。[18] こうした基本的立場にたつリーズは記者として如何に行動したのであろうか。

彼はポリス・リポーターであり、ゆえに殺人をはじめ犯罪、火事などいわゆる事件ものを扱うわけであるが、それらをどう処理したであろうか。ステフェンズによると、リーズがトリビューン紙からかわり、ステフェンズ自身も後に入社したイブニング・サン紙は、センセーショナルな事件もの記事、悪しきジャーナリズムに反する手堅い立場を保持していたとしても、当時（一八九〇年頃）のニューヨークの新聞は新奇な、面白い、スリリングな事件ものの報道を主としていたという。こうしたなかでステフェンズはリーズを次のように評している。リーズは、自殺、犯罪、火事など記者が誰でも追いかける事件を単に事件としてでなく、その事件を生みだした根源、背後にひそむ悪、人びとの貧困な生活条件等、事件の人間的社会的側面を見極め、それとのかかわりで事件を考えた。[19] 「彼はニュースを獲得するだけでなく、ニュースを大事に扱った」のである。ステフェンズの批評をまつまでもなくリーズ自身もいっている。「われわれは、記事にした不幸を面白がったりはしなかった。われわれはリポーターであって墓アバキ（ghoul）ではないのだ。」彼にとって事件を書くということは、事件を人生の物語としてであり、その意味を明らかにし人間の問題を考えさせるためである。それは日曜日の牧師以上に多くの人々を考えさせることができるはずだ、と彼は信じる。[20]

リーズにとって事実はそのものとして価値あるものではなく、行動をおこす基点としてのみ価値を有する。彼はもともと行動家であり情熱家である。それは「自伝」をはじめ前述の二書のすみずみに脈うっている。彼は人間生活の改善に役立たない社会理論は全く意に介さないし、「科学」というものは、人類の熱意を死のように冷たくさます「方法」だともいえ、どうするのか教えない科学など自分にとって退屈だとも言ったりしている。[21] 近年、レイン（James B. Lane）

は、当時のニューヨーク慈善組織協会の中心人物ロウエル（J. S. Lowell）との関連において、リーズの社会事業実践の側面を丹念に追究しているが、そこにおいて、リーズが統計調査や理論的論議よりも学校、病院、公園、セツルメントの如き社会施設を好み、その効果を目にみることができる具体的、直接的なサービスや施与に汲々としたかなり性急な行動家であったことを浮彫りにしている。[22] 彼がポリス・リポーターの時代に、花咲く原野も知らず人生を終えるスラムの人びとのために花をあたえようと新聞に訴え、彼のオフィスを花で埋めたことは有名な話である。また、彼の「他の半分の人びと」の中に、「慈善家から私がひきついだケース」というくだりもあって、単なるリポーターにとどまらず社会事業的活動をもしていたことがうかがえる。要するに彼は何よりも行動家であったのである。しかしこの行動的な彼が、前二書をあらわす段階では、まず第一に事実を明らかにする、いわば調査的志向に傾斜している。これらを書きおえた段階、すなわち一八九三年、彼は自分の役割は、実践家たちがそれを基礎として進む事実をデモンストレートするのみと語った。きわめて性急な行動家であったリーズにとって、直接的な援助過程ではない調査などむしろ無縁のものであるはずである。しかしリーズは、親交のあったロウエルのように社会事業実践に専念する立場に自分はあるのでなく、自からはリポーターであることを自覚しなければならなかったのであろう。リーズは社会事業実践に関心をもち自から行動もするが、専従者ではなく、専従者には及ぶものではなかった。彼はリポーターとして実態を調査し、事実の収集とその報告に力を注いだ。しかし彼のデータは人びとを具体的な実践に向ける熱いデータであった。人間苦難の悲痛な物語、貧困の餌食とのパーソナルなふれあいこそ、人間をバラバラに分解してしまう統計表よりもいっそう有用であると、彼は確信していた。[23]

一般に、調査報告あるいは記録の価値は、報告者がそれを如何にして記録したかにかかっている。見知らぬ町を訪れた旅行者、ゆきずりの観察者、傍観者の立場での記録は十分価値をもち得ないのはいうまでもない。リーズのそれは、十数年に及ぶ昼夜をわかたぬそこでの取材活動の体験に基づいている以上、信頼でき十分評価されるべき条件を備えて

いるといえよう。事件を追う取材活動もあれば、警察の衛生係員と貸アパートの状況調査に加わることも、そしてまた工場監督官とともに工場の立入調査に同道することもあった。しかし工場調査にしても、多くの工場を訪れたがほとんどの場合自分一人であったと彼自身言っている。[24] しかし取材活動を十分にするために、すなわち十分かつ正確な事実を収集するために協力者を動員するなど工夫をこらしている。彼は探訪活動を tours of inquiry と呼び、たとえばユダヤ人街ではユダヤ人である協力者を伴うなど、「私の仕事の意義――彼はこれを mission という言葉で理解する――を理解し共感してくれるその土地の一人を伴うことを常とした」という。相手と同じ人種でその母国語を話すこの協力者のあることによってかたくなに閉そうとする相手の口を開き、情報を集めることに成功した。「このような配慮なしには私のお使い（errand）は無益なことであったろう。彼をともなってすら、多くの場合、それに近かったこともあったから……」と述懐している。[25] そこに、彼の事実を追い求める苦労、事実についてのひたむきな姿勢、真摯な調査マンとしての姿というべきものが浮彫りにされているといえよう。

5

そのとき、新しい世紀が真近に迫ってくる。周知のように一九〇〇年の前後数年間、正確には一八九七、八年から一九〇三、四年の間を世紀転換期（the Turn of the Century）といい、アメリカ史において特別な意義があたえられている。それは、のちアメリカの世界的地位を確保せしめる海外進出の開始、貧富の隔絶を問題として含む典型的資本主義社会の確立、これに対抗する批判精神の成長と革新政治への志向の三点に要約される。そしてこの時期は、一九〇一年から一九一七年にいたるいわゆる革新時代（Progressive Era）に重復し接続展開される。この時期がマックレーカーズを生み、マックレーカーズがこの時期をつくった。前述のイブニング・サン時代にリーズと知り合いその影響を受けたステフェンズがマックレーキングのチャンピオンとして活躍したのはここにおいてであった。

ステフェンズが、アメリカ主要都市の市政腐敗を告発し、自覚せる市民が誇り得る町を建設することを訴えた有名な「諸都市の恥」(*The Shame of the Cities*) の連続執筆を開始したのは一九〇二年からであったが、一九〇四年、一書としてまとめられたそれは、都市すなわちアメリカの産業中心地帯における経済組織と政治組織との関係を明らかにした調査報告としても評価され、一九三〇年にラッセル・セージ財団が出したパンフレット「社会調査目録」(*A Bibliography of Social Surveys*) にも載せられている。[26]

この「諸都市の恥」はリーズのステフェンズに対する直接の影響とはいえないようである。彼は、イブニング・サンからコマーシャル・アドバータイザーを経てマックルア誌に編集者としてむかえられたのであるが、この経営者サムエル・S・マックルアこそ暴露読物の人気を発見した人といわれる。しかしこのマックルア自身のいうところによると、マックレーキングの時代を始める計画的意図がはじめから入念にたてられていたわけでなく、ただ世人が注目した事態を他の新聞、雑誌がとりあげる前に先取りすることを考えただけで、いわば成行きに過ぎないとのことである。彼は才能のある人をむかえ入れていたが、ステフェンズと双璧をなすアイダ・ターベル (Ida Tarbell, 1857–1944) に、当時、トラストが問題視される中で、トラストの母とされたロックフェラーのスタンダード石油会社の内幕を追究させ「スタンダード石油会社史」を発表させた。一方、ステフェンズは話の種を求めて旅する中で、セント・ルイスにおいて若き検察官ジョセフ・W・フォークが市政の腐敗を告発する果敢なたたかいをしているのに行きあたり、「諸都市の恥」の最初のシリーズ「セント・ルイスにおけるトウィード時代」をものにした。この二つの読物は大いに人気を博したことからマックルアはさらにマックレーキングを続行し、多くの出版社もこれに追従し、マックレーキング時代を招来することになったのである。[27]

誇張や単なるセンセーション、いいかげんな書きものも沢山あった。しかしマックルア誌は量よりも質を重んじ、真実を暴露する高い水準を保とうとした。もともと、ステフェンズやターベルのそれは、非常に多くの時間と労力をかけ、

周到な調査、資料収集に基づく事実からなる告発であり、それこそマックレーカーの範とすべきものであった。ステフェンズ自身は、彼の「諸都市の恥」について、自分はジャーナリストであるから、すべての事実を公平に集めたわけでないし、それら事実を恒久的保存と科学的分析のために念入りにアレンジしたわけでないと慎重な発言をしているが、[28] 事実に対する厳正な態度は調査者の態度であったと、リーズと同様の評価をあたえることができよう。

さらにもう一つのケースとして、現代アメリカ宣伝主義小説家の第一人者であり、最後のマックレーカーと称せられるアプトン・シンクレア（Upton Sinclair, 1878–1968）がシカゴ屠殺場の労働と衛生状態に対する痛烈な告発、小説「ジャングル」をあらわし、人びとに大きなショックをあたえたのは一九〇六であった。これが真に迫力をもち得たのは、それが実地調査、すなわち七週間に及ぶ彼の屠殺場の参与観察に基づくものであったからである。[29]

マックレーカーはセオドア・ルーズベルト大統領が、専ら醜状を摘発するのみで建設的でない暴露主義者を非難するためにバニアンの「天路歴程」の中に床の汚物をかきだすことに専心して他の何ものも気づくことのない肥し熊手をもつ人物にそれをなぞらえたのであった。ルーズベルトは「あなたのことを言ったものではない」と、ステフェンズに語ったとのことである。[30]

ふつうには一般の人びとが知りようもない大企業や政界の腐敗した内幕、悪徳の摘発は、民衆をして自分たちの住この社会の実態を知らしめ、問題を自覚させ、改良への意欲を刺激する。自分たちの生活するこの現代が、自分たちの住むこの社会が、事実はどのようなものか、その全体をより公平に客観的に明らかにする調査が、ここに時代の要請となる。かくしてアメリカ最初の本格的な社会調査、ピッツバーグ・サーベイが一九〇九年にスタートするのである。

世紀転換期、革新時代における批判精神の高揚と革新運動の展開は二〇世紀をめぐるその時期に忽然としてあらわれたものではない。生産の繁栄と富の畜積の一方に大量的な貧困の創出と深化を結果する資本主義社会状況の進展にともない、体制批判と改良への志向は一九世紀半ごろから現れてきている。一八八〇年代にはヘンリー・ジョージの「進歩

と貧困」(Henry George, *Progress and Poverty*) が書れていたしマルクス、エンゲルスの作品も移入された。しかしマックレーキングの先駆ともいわれるヘンリー・ロイドの「共和政に反する富」(Henry D. Lloyd, *Wealth against Commonwealth*) が書れたのは一八九四年であった。それは、彼が宗教的な立場から、人間を腐敗に追いこむ大トラストの生態を突いたものである。リーズは近代都市の貧困をそれよりも早い段階で告発していたことを考えると、リーズこそ最初のマックレーカーといえるかもしれない。レーンは、マックレーカーという新語が登場するずっと以前にリーズはマックレーカーとなったといい、「他の半分の人びと」は革新主義運動の開始をたすけたと評している。[31] その通りである。リーズと後の社会調査発達過程とのかかわりは、リーズ→ステフェンズ→マックレーカーズ→革新運動の展開→社会改良のための社会調査運動という一般的な流の中によみとれようが、もっと鮮明に社会調査とのかかわりを示す証拠がある。彼はピッツバーグ調査の指導者であるポール・ケロッグ (Paul U. Kellogg, 1879–1958) と親友の間柄であったし、その調査については直接助言をあたえているからである。

一九〇五年、リーズは都市再建運動を促進するため慈善出版委員会に加わった。そこでの仕事は雑誌「慈善と民衆」(*Charities and the Commons*) の特集として本格的な調査を行ない刊行を企画することであった。この雑誌の編集者はエドワード・T・デバイン (Edward T. Devine, 1867–1948) とポール・ケロッグであった。リーズは福祉問題の調査と研究に専念するこの二人の人物に大いにひかれ、親交を結ぶにいたった。ピッツバーグ調査はこの委員会のもっとも野心的なプロジェクトであり、当時二八歳にすぎなかったケロッグを指導者として行なわれた。彼は都市計画、労働問題、ソーシャル・ワーク等の専門家をあつめ、当時アメリカの代表的工業都市ピッツバーグの包括的な調査を行なったのであるが、この調査の方向づけについては、セツルメント運動を通じて当時の代表的な社会事業家となっていたジェーン・アダムス (Jane Addams, 1860–1935) とわれわれのこのリーズとがアドバイスをあたえたのである。その調査実施と出版の資金は、ラッセル・セージ財団 (Rusell Sage Foundation) がこれを出した。アメリカにおける財団の

創設と発展は二〇世紀初期に相ついだが、その時期は前述のマックレーキングの時代に合致している。巨大企業に対する批判と追究が、民衆の歓心を買うためにその利得の一部を公共的目的に放出する手段として財団はつくられたという見方があるが、ラッセル・セージ財団は一九〇七年に設立され、のち社会事業、社会改良の実践と研究に大きな貢献をするが、ピッツバーグ調査はこの財団の初期の大事業であり、財団が公共の福祉に貢献しうるものであることをデモンストレートするものであった。[32] 調査結果の要約は順次、「慈善と民衆」や他のいろいろな刊行物にのせされ、展示会や講演会で発表され、ピッツバーグ調査にならって数多くの調査が各地で行なわれ調査時代が招来された。

文筆活動や講演による、啓蒙活動に専念していた当時のリーズも、ピッツバーグ調査を高く評価していた。[33] ピッツバーグ調査は世紀転換期、革新時代の社会的状況の産物であり、リーズの働きはこの状況形成の途における間違なく一つの偉大な柱であった。しかもかかる一般的記述をさらにこえて、ケロッグやピッツバーグ調査自体との前述の明確なかかわりにおいて、リーズはアメリカ社会調査発展に不可欠な人物、社会調査の先駆者として、その発達史にまぎれもなく結びつくのである。このように、新しい社会の新しい事実を発掘し記述しようとするジャーナリズムと社会調査の諸運動、新しい社会の生みだす問題に対処しようとする社会事業と社会改良の諸運動――世紀転換をめぐるこうした四つの大きな流れが一体となって流れるその中に、時代の子としてジェコブ・リーズがあったのである。

6

かくして本稿は完全に終るはずである。しかし多少のエピローグを付け加えておこう。一つにはリーズの社会改良家、社会事業家としての側面についてである。彼は児童問題にかんするその研鑽とルーズベルト大統領との親交によって、社会事業をはじめて国家的レベルに躍進せしめたと評価される[34] 一九〇九年、セオドア・ルーズベルト大統領による第一回、児童にかんするホワイト・ハウス会議に招待されたこと、自からもセツルメント・ハウスをもち改良、啓蒙運動と

ともに社会事業実践に専念することにより、アメリカ「社会事業大辞典」に一ページをあたえられる社会事業家として永遠に名をとどめられていること[35]、さらに貧民の問題は貧民自体の組織化という住民・対象者参加方式によって解決されるという彼のアイディアが、この七〇年代社会福祉の動向にマッチするものとして再認識されていること等である[36]。

もう一つは社会改良、社会調査とジャーナリストとの関連についての側面である。リーズをはじめ、ステフェンズ、シンクレア、ケロッグ（彼もまたリポーターとして職業生活を開始し雑誌「慈善と民衆」の永年の編集者として彼の業績は、「勇気あるジャーナリズム」賞“Courageous Journalism”Evening Post Medal を獲得せしめている）――これら本稿の登場人物は広い意味でジャーナリストといえる人びとであった。社会調査とジャーナリズムとのこの結びつきはアメリカに限ったことであろうか。

英国においてチャールス・ブースのロンドン調査の前には貧民の状態にかんするジャーナリステックな書きものが現われていた。大作としてヘンリー・メイヒューの「ロンドンの労働と貧民」（H. Mayhew, *London Labour and the London Poor*, 1851）があるが、彼は大衆小説を書く一方、一八四一年発刊の「パンチ誌」の発起人ともなった、ジャーナリストといえる人物である。

わが国においてはどうであろうか。わが国社会調査の発祥は明治期における貧民窟の探訪的記録にこれを求めることができる。筆者不詳とされているが、ある記者の貧民窟観察記が「東京府下貧民の真況」として明治一九年三月から四月にかけて「朝野新聞」に連載されたのを皮切りに、記者鈴木梅四郎による「名護町貧民窟視察記」が明治二一年、「時事新報」に、記者桜田文吾による「貧天地饑寒窟探険記」が明治二三年、新聞「日本」に連載された。わが国の社会調査発達史において重要な位置をしめる「日本の下層社会」（明治三二年刊）のその著者、横山源之助も当時の「毎日新聞」の記者として取材活動をする中でこの一書をまとめたのであった。新しい社会の新しい事実――労働者階級の実態、貧困、スラム――はジャーナリズムが追究し世人にこれを訴え啓蒙すべき課題であった。事実を発掘するジャー

ナリズムの仕事は、科学者にひきつがれより丹念に系統的なメス――科学的調査――が加えられる。イギリスやアメリカではその通にことは運んだ。わが国の場合、同様のジャーナリストたちの活躍にかかわらず、ロンドンやピッツバーグの調査に類すべき包括的な都市調査は遂に行なわれることなく終ったのである。(37)

注

(1) "*Social Work Research*" pp. 8-9. 一番ヶ瀬康子「アメリカ社会福祉発達史」光生館、一九六三年、五四―六〇ページ。
(2) Paul. U. Kellogg, *Pittsburgh Survey*. Russell Sage Foundation, 1914, Introductory Note.
(3) Pauline V. Young, *Scientific Social Surveys and Research* 1956, pp. 18-21.
(4) Jacob A. Riis, *The Making of An American*, 1901 (1961) p. 1.
(5) Ibid, "To the Reader"
(6) Joseph L. Steffens, *The Autobiography of Lincoln Steffens*, 1931, (1958), p. 203.
(7) Riis, op. cit., p. 212.
(8) Ibid, "*Introduction by Theodore Roosevelt*" 一九一四年六月六日「アウトルック」にのせられたこの文章が自伝の序文に転用されている。
(9) リーズは写真機のこと、写真をうつす苦労などいろいろ書いている。彼の写真はニューヨーク市博物館に保存されており、Henry F. Graff "*The History of the United States*" の一巻、Bernard A. Wecsberger, "*Reaching for Empire*" に四枚がのせられている。この本は清水知久氏の訳で時事通信社より出版されているので、リーズのうつした写真も、これによってわが国でもみることができる。
(10) Riis, "*How the Other People Lives*" 1890, (1957). p. 92
(11) Ibid., p. 100.
(12) Riis, "*The Children of the Poor*" 1892, (1971) "Preface".
(13) Ibid., p. 1.
(14) Ibid., p. 16, 28, 31, 38, 86.
(15) Riis, "*The Making of An American*" p. 200.

ある新聞記者のたたかい

(16) Ibid., p. 62.

(17) Riis, "*The Children of the Poor*", "Preface".

(18) Riis, "*The Making of An American*" p. 42.

(19) Steffens, op. cit., pp. 179, 203.

(20) Riis, "*The Making of An American*" pp. 133, 131.

(21) Ibid., p. 42.

(22) James B. Lane, "*Jacob A. Riis and Scientific Philanthropy during the Progressive Era*" *Social Service Review*, Mar, 1973, pp. 32–48.

(23) Ibid., p. 43.

(24) Riis, "*The Children of the Poor*" p. 102.

(25) Riis' "*How the Other People Lives*" p. 93.

(26) Young, op. cit., p. 19.

(27) Ernest R. May, "*The Progressive Era*" 1964, 有賀貞訳「革新の時代」時事通信社、一九六六年、五八—五九ページ。アメリカ学会訳編「原典アメリカ史（第五巻）アメリカの形成下」一九五七年、一七九ページ。

(28) Young, op. cit., p. 20.

(29) Robert B. Downs, "*Books That Changed America*" 1970, 斉藤光他訳「アメリカを変えた本」一九七一年、一三二—一三五ページ。

(30) Steffens, op. cit., p. 357.

(31) Rane, op. cit., p. 32.

(32) Robert H. Bremner, "*American Philanthropy*", 1960, p. 117–119.

(33) Rane, op. cit., p. 43.

(34) J. J. Stretch "*The Rights of Children Emerge: Histrical Notes on the First White House Conference of Children*", *Child Welfare*, July 1970, pp. 365–372.

(35) Harry L. Lurie (Ed.) "*Encyclopedia of Social Work*" 1965, pp. 666–68.

(36) Rane, op. cit., p. 45.

(37) ジャーナリズムと社会調査とのかかわりは、かねがねの筆者の一つのテーマでした。昭和四九年三月、本学新聞学教授和田洋一先生の定年ご退職を機に本稿を書き上げたことを付記します。

（一九七四・三・三一）